

赤木桁平

転向の時代

第二章

轉向の時代

(『虞美人草』 — 『門』)

漱石先生が東京朝日新聞社に入社されるまでの作品は、『吾輩は猫である』にしても、『漾虚集』にしても、また、『草枕』にしても、皆創作とは云うものの、厳密なる意味に於いて、世の所謂小説とは大分違ったところがある。第一、その作品の内容をなすところの事件が、緊密なる因果関係を以て連結されたところもすくな尠ければ、また、予定の劇的経過を以て発展するところも乏しく、いわば何処から読み始めて何処で読み終ってもいい性質

の作品が多数を占めているが、同新聞社に入社以後の作品は、初めて小説らしい小説の形式を具えて来たと言つていい。

『虞美人草』

『虞美人草』に就いて論ずる前に、自分は先ず『野分』に就いて一言しなければならぬ。『野分』は『虞美人草』に先だつこと約一年ばかり以前、雑誌『ホトトギス』誌上に発表された小説であるが、この小説に於いて、先

生は『吾輩は猫である』、『坊っちゃん』以来の正義観を、最も露骨に、最も痛酷に發揮して、正義の尊むべきもの、人格の重んずべきものであることを力説した。一個の芸術品として見ると、この小説は、単に作者の抱懐する觀念を具象的な形式にして表現したままで、与えられたる素材が何等の芸術的醇化を経ていないがために、甚しく価値の乏しいものになってはいるが、先生の内的生活の経過を^{けみ}検し、先生の精神生活の推移を探ろうとするものにとつては、かなり重大なる意義を持つべきものである。従つて、『野分』一卷が有するところの価値は、

最後の二十余頁を領する白井道也の演説に在ると云つてもいい位いで、その功利的人生觀に対する熾烈なる攻撃や、物質的生活に対する辛辣なる批評やは、和辻哲郎氏の所謂「道德的疝癩」かんしやくの爆発を意味するものであつて、能う限り諷刺とユーモアとの世界に廻避しようとしていた先生の鬱憤が、終ついに最後の抑制を排して逆出したのである。故に白井道也の演説を読むと、その背後に燃ゆるがごとき情熱と、溢るるがごとき感激とが潜んでいて、字々句々涙を以て人に迫るだけの真実が籠っている。

『野分』に於いて、以上のごとく「道德的疝癩」の最後

の爆発を示した先生は、『虞美人草』に於いて、初めて具体的に正義と虚偽（この場合にあつては人間の卑陋ひろうなる主我心エゴイズム）との戦いを写し、虚偽が終に正義のために敗北するところを描いた。併し、この作品に描かれている主我心エゴイズムの敗北は、それが運命の予定されたる摂理、即ち、「かくある」の因果を語るものではなく、寧ろ作者自身が抱懐する倫理観、即ち「かくあるべき」の欲求を示している点に於いて、著しく主観的要素が濃厚である。その当然の結果として、『虞美人草』一卷の構想は、かなり不自然なる作為の迹あとを残している。結末に於ける藤尾

の唐突なる死のごとき、慥かにその顕著なる一例だと思
う。

『虞美人草』には、すくな 尠くとも四人の主要なる人物がい
る。甲野、宗近、小野、藤尾の四人がそれであって、前
二者が暗に正義派を代表するに對し、後二者は暗に虚偽
派を代表している。その他にも宗近の妹のごときは前者
の色彩を帯び、藤尾の母のごときは後者の色彩を帯びて
いるが、これらの性格描写が一種の「類型」に墮して、動やや
もすると潑刺たる人間味を喪い易い点は、『虞美人草』
一卷が有する最も著しい欠点であって、同時に、作者の

観念を芸術化する上に甚しい障礙しょうがいとなつてゐる。さらに言葉を換えて云うと、『虞美人草』に描かれている人物は、その人格的着色があまりに判然たる善悪を以て染め分けられているがため、何となく生々として実在性を欠いて、与えらるべき効果が兎角脾弱ひよわになり勝ちなのである。この意味に於いて、ある批評家は『虞美人草』を「馬琴式の作品」だと非難したが、その非難の中にはたしかに幾分の真理がある。

併し、性格上の倫理的要素を外にすると、その他の点（特に全性格の基調たるべきテンペラメント気質）では、それぞれの

人物が、皆それぞれの個性を以て動き、宗近、藤尾のごとき一二の人物に至っては、殆んど活躍浮動の域にあると云つてもいい。甲野は、『野分』の道也先生を若くして、これを消極的に改鑄したとも云いたいような人物であるが、その性格（単に倫理的要素の方面ばかりでなく）の上に何となく概念的なところがあつて、到底宗近や藤尾のそれのごとき鮮かさを持っていない。甲野に較べると、宗近の妹は遙によく描けているが、これを要するに、

『虞美人草』一篇の与える面白味は、その複雑なる性格描写の上にあるのではなくて、全く『野分』風の崇高な

る道義観と、『草枕』式の華麗なる表現と、戯曲的な事件の開展との上にあると、このを至当とするだろう。

『野分』に表れている先生の道義観に較べると、『虞美人草』に於けるそれは、慥かに一步を進めているような気持がする。何故なれば、先生が『野分』に於いて完膚なきまでに排撃し去りたる功利的的人生観や物質的生活は、『虞美人草』に於いてその心理的根拠を人性固有の主我心エゴイズムの裡うちに発見し、主我心エゴイズムに対する正義の葛藤を描いて、これを死という厳粛なる事実てきめんに觀面せしめることに依り、一種の運命観を吐露しようとしていられるから

である。従つて、学者の權威を説き、金権の横暴を罵る白井道也の演説に対し、悲劇の意義を論じ、道義の必要を力説する甲野の日記は、その深さに於いて、また、その広さに於いて、かなり顕著な徑庭けいていを示していると思う。無遠慮に云うと、『野分』に表れている先生は未だ志士の気魄を感じしめるに過ぎないが、『虞美人草』に表れている先生は慥かに哲学者の氣稟きひんを偲おもはせるところがある。——勿論、両者共に理想主義者であることには何の相違もない。

絢爛瑰麗なる点に於いて、『虞美人草』の文章は『草

枕』のそれと相距へだたること遠くないものである。併し、紛々たる匠気しやうきの附き纏まとっている点、先生自身の言葉を借りると、所謂「粉飾余りに華麗にして強烈なる香水を嗅ぐに似て多少失神の気味なき能わず」という点から見ると、前者は後者よりも猶お甚しいところがある。これは『虞美人草』のポピュラリチーをかちえさせるためには多大の効果があつたらしくはあるが、作品全体の上から見ると、決して欣よろこぶべきことではなからう。尤も、文章そのものより見た先生の技倆は、慥かに驚嘆に値するものであつて、明治、大正の文壇その人多しと云えども、

自分は未だ先生に匹敵しうる作家あるを知らない。この種の見地に立つと、『虞美人草』一篇は、『草枕』、『漾虚集』の諸篇とともに、恐らく永久に愛誦せられる性質の作品であろうと思う。

『虞美人草』の構想は、その中に描かれている事件が、最初はかなり緩漫なる速度を以て進行していながら、終局に近づくに従って、漸次に加速度的な発展を加えてゆく点に非常な興味がある。殊に、離れ離れに起りつつあった許多あまたな事件が一所ちようそに朝宗して、結末に於ける急転直下の解決を齎もたらし来るところなどは、殆んど戯曲家的

な技巧を恣ほしいままにしているものであつて、先生の芸術的境地に、さらに開拓せらるべき他の方面の存在していることを語っている。この点に於いて、第二に自分の所信を確めるものは、先生の対話を操縦つて行く技倆の卓越していることであるが、中に就いても第十六章に於ける宗近と宗近の妹との対話のごときは、表面極めて淡泊なる形式を以て進んでいながら、波瀾あり、変化あり、情味があつて、真に好個の劇的場面を見せている。先生が自ら誇負して「この作者は趣なき会話を嫌う」と喝破していられるのは、まことに所以あることだと思ふ。

『坑夫』

『虞美人草』の次ぎに『坑夫』があり、『坑夫』の次ぎに『三四郎』があるということは、漱石先生の研究家にとつて、かなり興味を惹く事柄である。

聞くとところに拠ると、先生自ら「自分が坑夫に就ての経験は是れ丈である。そうしてみんな事実である。其の証拠には小説になっていないんでも分る」と云つていられるごとく、『坑夫』は先生が某なる人の経験談を基礎

として、これに小説的な潤色を加えられたものだということである。そうした理由に因るのかどうかは知らないが、それまでに発表されている先生の作品に較べると、『坑夫』は非常に写実的リアリスチックな傾向に富んでいる。例えば『虞美人草』を読んだ眼を転じて『坑夫』に移すと、第一に文章が違ふ、第二に叙述の形式及び態度が違ふ、第三に心理サイコロジカル・アナリシス解剖の有るのと無いのとが違ふというわけだ、両者の間に存する本質的な相違は、真しんしように参商ただも啻ならずと云いたいようなところがある。

『坑夫』の文章は何と評していいか、自分にも今適当な

語彙を見出すことが出来ないが、何れいずにしても『虞美人草』のそれに比較すると、極めて色気や艶気に乏しい、おしろい白粉抜けのした文章である。従つて、絢爛だとか瑰麗だとかいう点は微塵もないが、それでいて何処にか一種の洒落気がある。「さつきから松原を通つてるんだが、松原と云うものは絵で見たよりも余つ程長いもんだ。何時迄行つても松ばかり生えて居て一向要領を得ない。此方がいくら歩行あるいたつて松の方で発展して呉れなければ駄目な事だ。いつそ始めから突つ立った儘まま松と睨めっ子をしている方が増しだ」という冒頭の一節のごとき、明かに

その好適なる一例を示しているものだと思う。けれども、文字そのものの興味、例えば語句の彫琢とか洗煉とか云うものが先きに立たずして、出来るだけ事実の内容を生かして行こうとする点から見ると、どうしても『坑夫』の文章は『虞美人草』のそれより写実的リアリスチックであると云つていい。

第二には叙述の形式及び態度、言い換えると、先生自身ややの所謂「表出の方法」に於いてであるが、動もすると、『虞美人草』の叙述が単なる抽象的な説明に終り易く、従って叙述の態度が多く主観的であるにも関らず、『坑

夫』の叙述は極めて具象的な描写に富んでいて、その態度もかなり客観的に傾いている。例えば「微茫かすかなる春の空の、底迄も藍を漂わして、吹けば揺るぐかと怪しまる程柔かき中に屹然として、どうする気かと云わぬ計りに叡山が聳えている」という『虞美人草』の一節を「其の山は距離から云うと大分ある様に思われた。高さも決して低くはない。色は真蒼で、横から日の差す所丈が光る所為か、陰の方は蒼い底が黒ずんで見えた。尤も是れは日の加減というよりも杉檜の多い為かも知れない。ともかくも蓊鬱こんもりとして、奥深い様子であった」という『坑

夫』の一節に比較して見ても、その辺の差違ははっきりと現れている。殊に、後者にあつては説話者自身が一篇の主人公であるがため、勢い自家の主観を透して環境を批判する地位にありながら、彼は彼自身をすら他人の眼を以て観、他人の心を以て察することを忘れない。そこに『坑夫』特有の心理解剖が生れて来たのである。

大胆に云うと、先生の心理解剖は『坑夫』を以て初まると云つても敢て不当な断言ではあるまい。勿論、これまでの作品にも全然それが欠乏していたとは云えないかも知れないが、兎に角心理解剖らしい心理解剖が初めて

形を具えて来たのは、明かに『坑夫』以来のことである。例えば、七頁の後半から八頁の前半に亘る自殺の決意に対する心理解剖や、十三頁から十四頁に亘る「働いても善いですが」という返答に対する心理解剖やを見ると、その形式が幾分深酷と繊細とを欠いているにしても、皆立派な心理的経過の描写には相違ないのである。しかも、この種の心理解剖は『坑夫』の全般に亘って随所に散見するところであるばかりでなく、『坑夫』一篇の有する芸術的興味の半ばは懸ってそこに在ると云ってもいい位いな地位を占めている。殊に、二百七十六頁から二百八

十頁に至る坑内中の複雑なる心理的経過を細写したあたりなどは、今日の眼を以てしても猶^なお推重に値するだけの卓越が示されている。——先生本来のリアリズムは、茲^{ここ}に至って漸くその根を深めて来たと云つていい。

併し、一個の作品として見た『坑夫』は遺憾ながら凡作である。なるほど上述のごとき長所を持つてはいるが、それは未だ芸術的完成の領域に遠いものであつて、それ自身に大した価値があるというのではない。言葉を換えて云うと、それらの長所が有する価値は先生の芸術的生涯に於ける歴史的意義に於いてであつて、先生の芸術的

業績に於ける本質的意義に於いてではない。

果してそうだとすると、『坑夫』に於ける最も至大な欠陥は何処にあるかという点、その第一は、描かれてゐる事件、取扱われてゐる事実が、殆んど血の滲むほど生々しい現実的経験でありながら、これを描く作者の態度（この場合には説話者自身）があくまで低徊的、非人情的であつたがために、素材の性質と作者との間に一種の不調和が起つて、これを渾一融和の至境に齎もたらし来ることが出来なかつたところにある。言葉を換えて云うと、非人情たらんとして非人情たりえず、現実的たらんとして現

実的たりえないどっち付かずのところ
が欠点なのである。第二に自分が不満に思うことは、かなり微細に、かなり綿密に描き出されているらしい坑夫乃至鉞山ないしの生活が、あれだけでは矢張上うわすべりの描写に終って、どうも飽き足りないところが多い。尤も、この際作者に与えられている素材は、作者自身の切実なる直接経験ではなくて、第三者から提供されたる間接経験（若し云い得べくんば）であるがため、終ついにそうした欠陥を暴露するに至ったものではあるうが、これは真正面から自分の非難を排撃するに足る言プロポーション訳とはなりえない。今一つ自分が認めて

この作品の欠点だと思ふものは、素材そのものの性質からとは云いながら、結末の付け方があまりにあっけないことである。自分の希望を云うと、全体の比例の上から云つて、また、全体の均斉の上から云つて、最後の帳附ちようづけ生活を今すこし悉くわしく語つて欲しい。若しそうすると、

『坑夫』一篇の構想が渾然とした纏まりを持って来るばかりでなく、作品そのものの与える芸術的効果の上に恐らくは欣ぶべき影響があつたらうと思ふ。

これを要するに、『坑夫』の価値は『坑夫』それ自身にあるのではない。『虞美人草』から『三四郎』に至る

「橋梁」として、若しくは、先生の芸術的生涯の発展を司配する一個の重要なる「分岐点」として、ある種の歴史的価値があるのである。従って、この事実を他にして見た『坑夫』に対する批判は、批判そのものに何等の権威がないと云ってもよからう。

『三四郎』

既に云ったごとく、『三四郎』は『それから』、『門』の二篇とともに、一つの三部作をなすものである。併し、

作品そのものを評隲^{ひょうしつ}する上に於いては、勿論それぞれを切離して考える必要がある。

普通『三四郎』は性格描写の小説だと云われている。嘗て小宮豊隆氏の「ごときも『三四郎』を評して、『三四郎』は、小川三四郎なる大学生を主人公にして、其の主人公の性格が、ある期間に於て、周囲の空気にかぶれて、段々と変って来る。其性格の発展をのみ目的として書いたのではない。主人公の性格を叙すると、同じ程度に於て三四郎が、かぶれた周囲の空気——即ち三四郎が影響を受ける、色々な友人知己の性格をも精細に描き出

したものである。言い換えれば、作者は、三四郎を中心に置いて、三四郎が浮遊している周囲の空気全体に興味を持って此一篇を書いたものである。それだから大きな意味に於て、キアラクター、スケッチの小説である」と云ったことがあるが、『三四郎』の中に描き出されている諸種の人物が、皆それぞれの個性と気質とを以て、自家の頭上に降り懸る運命に司配されつつ動いて行く点は、慥たしかに『三四郎』一卷の中心興味を形作る基調であって、その内容的価値に就いて考え及ぶとき、これを外にしては殆んど何等の意義が無いと云っていいかも知れ

ない。

自分は前に『虞美人草』を評し、『虞美人草』の性格描写には一種の「類型」があると云ったが、『三四郎』の性格描写に至っては、そうした意味の欠点が残んど振い落されて、ある程度の渾然たる境地にまで達している。中に就いても主人公三四郎の性格の発展を叙述する作者の描写は、その心意の転化に対する感受の鋭敏なる点に於いて、また、その環境の影響に対する理解の富贍ふぜんなる点に於いて、恐らくは『三四郎』一篇の眼目をなすものであると思うが、慥かに驚くべき成功を遂げている。

——その他の性格またそれぞれに活写されているが、最も面白いのは与次郎と女主人公美禰子とである。前者には作者の趣味性が観念化された嫌いがあり、後者には作者たる先生の所謂「表出の方法」に一定の方針が存在していたかどうかを疑わしめるようなところはあるが、それらの欠点は未だ以て全体の卓越を傷けるに至らない。

『三四郎』に至って、先生固有のリアリズムがますますその形を整えて来るとともに初めて「客観的態度」とも云うべき或物が判然たる存在を持って来た。この意味に於いて、『虞美人草』から『三四郎』への推移を連絡す

る『坑夫』の非常に重視すべき所以は既に説いて置いた通りであるが、『坑夫』に最初の萌芽を示したりアリズムに比較すると『三四郎』に表れているそれは、猶お多くの醇化と精錬とを具えている。その最も著しい实例を挙げると、『三四郎』には最早『坑夫』に於いて見るがごとき低徊的態度、非人情的態度の甚しく作品の主潮を動かしているところがなく、作者の表出は、その根柢をあくまで「直接感」（「実感」という方がいいかも知れない）の上に置いていることである。従って、作品の一部を彩る色調は未だロマンチシズムの域を脱し切っていない

が、その全体の傾向は既に定まっていると云っている。例えば、『三四郎』には作品自身の有する気稟と風格とは出ているが、併し『野分』や『虞美人草』に於けるがごとき露骨な道義的批判は出ていない。自分の考えから云うと、かくのごときもまた作者の態度の漸くりアリスチックに赴きつつあることを実証するものである。この点に於いて、自分の唯一つ飽き足りなく思うことは、表現の上に纏絡てんらくする一種の臭味、即ち、『虞美人草』や『坑夫』頃までの作品に屢々見かける言葉使いの上の銜気げんきから来る一種の不純なる感じが、この作品に於いても猶お

幾分残存していることである。例えば、『三四郎』の十六頁に「三四郎は此処迄来て、更に悄然しよげて仕舞った。何処の馬の骨だか分らないものに、頭の上がらない位どや打された様な気がした。ベトコンの二十三頁に対しても甚だ申訳がない位に感じた」という一節があるが、この一節に於ける最後の文句のごときは、奇警は即ち奇警であろうが、矢張作品そのものの上にいい効果を与える所以ではない。同じ理由からして、自分は最後に近い章にある「われは我が愆とがを知る。我が罪は常に我が前にあり」という美禰子の独語や、「迷羊ストレイシープ、迷羊ストレイシープ」という三

四郎の独語などに対しても、何となく嫌味であるという理由の許に賛意を表することが出来ない。併し、一度ひとたび振り返って、『虞美人草』の女主人公藤尾の会話などに想い到ると、先生の表現的形式も随分自然に近づいて来たものだと思う。

『三四郎』は一個の芸術品として見ても、決して価値の低い作ではない。前にも云ったごとく、単にあれだけの性格をあれだけ靈活れいかつに描き分けてある点に於いても、十分佳作を以て許すべき資格はあるが、先生の全業績の上から云うと、それが恰も先生の「ロマンチズムからり

アリズムへの推移」の過程に存在しているがため、ただ何となく過渡期の未成品という匂いがして、自分の頭にどうもはつきりした芸術的感銘を与えない。『坑夫』に於いて初めて発見した先生の心理解剖も、『三四郎』にあっては別に著しい発展を示していないから、それに就いてもまた何となく不満がある。——その他の点に關しては、この際すべてを端折ることにする。

『それから』

所謂三部作の第一作たる『三四郎』に較べると、その第二作たる『それから』は、いろいろの点に於いて素張らしい飛躍を遂げている。——おも惟うに『それから』は、その第三作たる『門』とともに、漱石先生の芸術的生涯に於ける所謂転向期を代表する傑作であろう。

『それから』の筋は単純である。代助と称する一人物が、単なる義侠心よりして、嘗てかつ相思の間柄であった一少女三千代を友人平岡の妻として周旋し、自分は自己犠

犠の寂寞に窈ひそかなる恋愛を包んで数年間を独身の裡に過していたが、不図した機会から起った代助と三千代との邂逅が、幾久しく両者の胸に秘められて、未だ判然たる形を作すに至らなかつた相思の情に火を点じ、一度び惑乱せる運命は終に代助をして平岡から三千代を奪い還すに至らしめるといふのである。——与えられたる事件の開展が、一種の戯曲的な「結末」の上に約束せられているといふ点に於いて、言葉を換えて云うと、その構想の基底に予め決定せられた因果の照応があるといふ点に於いて、この作品は『虞美人草』以後に於ける最初の試み

だと云っていい。

併し、「それから」一巻を司配する芸術的内容は、決して上に述べたような事件の推移と、開展と、解決とを連絡する単純な技巧上の効果にのみ奉仕されているものではなくて、その他にも猶お多くの従属的要素を包擁し、かなり複雑なる味いと、かなり多様なる色合とを備えている。例えば、所謂性格描写のごときもその一つである。自分は既に『三四郎』の芸術的内容を解剖して、その性格描写の卓越を推奨して置いたが、この『三四郎』に於いて發揮せられた性格描写の卓越は、『それから』に至

つて、さらにより一層の練熟と、さらにより一層の確實とを以て「完成」せられているのである。自分が敢て「完成」という所以は、『三四郎』のそれが、扱われている人物の如何に依つて未だ優劣上下の区別から免れがたい失があるに反し、『それから』のそれに至つては、全篇の中に描き出されている多数の人物が、それぞれの意味に於いて、皆それぞれの特徴の下に活躍し、一人として曖昧なる性格、一人として不明なる人間は存在していないからである。この点に於いて、男女の両主人公は勿論、父、兄、嫂、門野、誠太郎の性格描写は、殆んど「鏤刻」ろうこく

とも評すべき明かさと確かさとを持っていて、その鮮かなる輪郭の裡に渦巻く内容の力は、何等の遺憾もなく描き出されていると思う。中に就いても、代助の性格と、代助の上に降りかかった運命が代助の性格に及ぼして行く影響、言葉を換えて云うと、環境の状態が代助の心意を支配して発展してゆく性格の変化とは、殆んど『それから』一篇の領略する芸術的興味の焦点とも云いたいものであって、この作品の基調をなす作者自身の運命観、即ち、自然を軽蔑したものが、やが臆て自然のために報復せられるという思想の具象的表現は、この一事を待って始

めて完璧なる成果を挙げえたものと云つていい。また、『それから』の裡には、一種の享樂主義者にして、且つ、一種の廻避的態度の所有者たる代助の聰明なる頭腦と、繊細なる神経と、鋭利なる眼孔とを透して見たる現代日本の文化と、その文化の有する疾患とに就いての作者自身の批評がある。それらの文明批評は、必ずしも代助の個性的必然を待つまでもなく成立しうる点に於いて、『それから』時代に於ける漱石先生自身の思想乃至態度を覗知しうるものであるが、これに拠つて見ると、『野分』時代の先生と『それから』時代の先生との間には、極め

て興味深い、極めて意味の深長な幾多の変遷と、幾多の推移と、幾多の転向とが存在するのを知るのであろう。併し、それに就いてかれこれ云うだけの余裕は、この際自分に許されていないから、単にその技巧的方面に就いてのみ一言しよう。

『それから』の構想は、その発端から結末に至るまで、聊かいふやの罅隙かげきも聊かの弛緩もなく、整然たる布置結構と、微妙なる首尾照応との下に纏め上げられている点に於いて、先生の全作中に在っても、恐らくこの作品に匹敵しうるものはなからう。殊に、開巻の劈頭から読者

の注意を「写真帖の女」に集め、この「写真帖の女」が漸く三千代という現実の女と化して読者の前に現れて来るや、代助対三千代の関係をして出来るだけ「自然」に、出来るだけ「必然」に発展さして行く技倆は、慥かに名手を以て許すべきものである。中にも最後の三分の一ばかりがいい。事件が急転直下に発展（あたか恰も『虞美人草』の結末に於けるように）して、三千代と代助とが相許すに至るあたりは、息をもつかせないほどの切実と緊張とがあつて、比較的冷静なる表皮の下に白熱せる情熱の沸き立っているところは、読者の心意に肉迫して、否応

なくこれを動すだけの熾烈なる力がある。ただ一つ憾みうらみに思うことは、既に阿部次郎氏も指摘していられるように、作者の叙述があまりに情熱的方面の描写を廻避しているために、読者の要求する情感の満足に於いて、著しく欠けていることである。これに反し、同じく題材を反因襲道徳的な恋愛に求めている点から『それから』と一種の類似を持っている二葉亭四迷の『其面影』は、その情緒的方面の細写されている割合に、殆んど理知的方面の閑却せられて^{はんしん}いる点に於いて、前者に対しかなり興味ある反襯を形作っている。

自分は先きに先生の性格描写が『それから』に至って完成したと云ったが、単にそればかりではない。『坑夫』から『三四郎』に迨およんで漸く濃厚なる着色を加えて来た先生のリアリスチックな態度（勿論、事象に対する観照の形式を云うのであって、対人生の根本的態度を意味するのではない）は、同じくこの作品に至って確立したと云っていい。若し、確立という語彙があまりに不穩当であれば成形と云ってもいいが、何れにしても、『それから』に表れている先生の観照的態度は、猶お『三四郎』の裡に残っているロマンチックな分子を振り落して、所謂低

徧的態度から来る余裕（自分は、この余裕をある時は遊戯と見、ある時は懈怠けたいと見るが）と、所謂非人情趣味に基く銜氣げんきとを擺脫はいだつし、その描写は殆んど客観的な色彩を以て一貫するに至ったのである。従つて、『それから』の作者たる先生の人生に対する態度には、猶お幾分のロマンチックな匂いを持つていながら、その事象に対する観照の形式には、正しくリアリストのみが有する直視と洞察とがあつて、その間に殆んど眼に着くほどの空想的分子をすら混入していない。芸術品としての『それから』が成功し、芸術品としての『それから』が人を動かす所

以の一部は、全くこうした芸術的態度の上にあるのであるが、併し、決してそればかりではない。自分の観るところに拠ると、その真当の原因は、寧ろ『それから』の中に出ている作者の恋愛観にあるのである。

「人間の作った夫婦という関係よりも、自然が醸した恋愛の方が、實際神聖だから、それで時を経るに従って、狭い社会の作った窮屈な道德を脱ぎ棄てて、大きな自然の法則を嘆美する声丈だけが、我々の耳を刺戟するように残るのではなからうか」——その後の製作『行人』に於いて、先生はその作品中に出て来る一人物の口を藉かり、大凡おおよそ

上のようなことを云っていられる。果然、それは『それから』一卷が我々に対して持つ強い力ではなかったか。

『それから』は、漱石先生の恋愛と恋愛的威力との、且つ、先生の運命と意思との相剋に対する解釈の、最も豊富な、最も完全な表白である。

『門』

漱石先生の生前、自分は先生自身の口を通して、屢々『門』の有する芸術的価値が『それから』の有する芸術

的価値の上にある由を聴いた。

所謂三部作の最終篇たる『門』は、『それから』の後日譚とも見るべきものであつて、宗助という会社員と、宗助の妻のお米という女との淋しい生活を描いたものである。このお米という女は、もと宗助の親友たる安井という男の妻であつたが、終に宗助との恋に落ち、その結果として彼にその運命を托したという暗黒な過去を脊負うているのである。この二人の男女が、断えず昔日の罪惡に責められながら、その罪惡の報償としてえた單調と、寂寞と、孤独との裡に、日蔭の花のごとく淋しい、且つ

静かな生活を営んで、しかも相愛し相いたわりつつ生きて
 いる様、即ち、心の奥深く恋愛の捷利しやうりに陶醉しながら、
 猶おその陶醉に甘心することを容ゆるされない正義感の反噬はんぜい
 に苦しみつつ相互に相愛している様は、極めて落付ある
 態度と、極めて静謐なる筆致とを以て描かれている。殊
 に、その客観的描写の透徹と精緻とに至っては、所謂自
 然主義のそれを想い起させるものがあつて、その拡がり
 に於いては、殆んど徂いくところまで行き着いていると云
 っている。

自分は嘗て『門』を読んだ時、始終眼底に涙無きを得

なかつた。溢るるがごとき作者の同情が男女両主人公の
上に注がれて、温かく彼等の運命を庇護している態度が、
その描かれている作品の内容と相応じ、如何にも饒かな
る情趣と、如何にも快よき感念とを与えたからである。
それは恰もトルストイの『アンナ・カレニナ』に現れ、
フローベルの『マダム・ボヴリー』に現れ、また、モー
パッサンの『女の一生』に現れているような意味の同情
であつて、毫も自然主義的觀照を害しないものである。
従つて、全体に於ける描写の態度が著しく自然主義的で
ありながら、わが国に於ける所謂自然主義の作品に於け

るがごとき、情味の曠欠こうけつに基く乾涸かんこくと頽廢との感じが尠すこしもない。思うに、自分が読過さいの際断えず涙なきをえなかつたように、作者自身も常に彼等の運命を愍あわれみ、彼等の生活を愛したに相違ないのである。

實際、『門』に於ける宗助夫婦の生活はよく描けている。極めて地味な、極めて静かな、極めて物淋しい背景の中に、愛に燃えた二つの温い心が睨しつかりと抱き合っている姿、殊に、夫婦の間に子の生れないのを気にしていろいろ苦悶するお米の心持や、また、それを愍あわれに感じてお米を慰めようとする宗助の心持などは、聊いささかかの

遺憾もなく描写されている。そうして、作品全体の上に漲っている一種の「甘さを持った悲哀」が、あたか恰もさわりの文句が与えるような余韻ある情趣を呼んで、読者の心に云いようもない快感を惹き起させるのである。尤も、坂井の主人から安井の消息を聞いた後の宗助の不安は、自分から云うと、今^{すこ}慚しく描き足りないような感じはあるが、併し、未だ作品そのものの価値に動揺を与えるほどのものではない。

『門』の中には、宗助とお米との男女両主人公以外に、わず纔か宗助の弟たる小六と、宗助の家主たる坂井の主人と、

宗助が鎌倉の禅寺で厄介になつた宜道ぎどうという若僧とが出て来るに過ぎない。その中で最もよく描けているのは勿論宗助夫婦であるが、その他の三人中で最も興味を惹く人物は坂井の主人である。この人物を見ていると、その傍觀者的、高等遊民的態度が、何となく中年期に於ける代助を想像させるところがあつて、作者たる漱石先生自身の生活態度の推移を考覈こうかくする上に、自分は非常に有力なる資料だと思ふ。小六は、作者自身が坂井の口を通して「彼は年に合わしては複雑な実用に適しない頭を有つていながら、年よりも若い単純な性情を平気で露わす子

供じやないか」と反問しているが、併し、実際に描かれている小六は、それほど明刻な印象を読者に与ええない意味に於いて、寧ろ失敗に近い性格描写であらう。一窓庵いつそうあんの宜道という若僧に就いては、茲こゝにかれこれ批評するほどの必要もあるまい。

『門』の文章は、『それから』の文章に較べると、線の細い、肌理きめの濃こまやかな文章である。しかも全体の色調が穏かで、聊かも華かなところがなく、清く澄み切った感じは恰も秋の空のようである。殊に、地の文に交って点綴せられた自然描写がいい。巻頭の「秋日和と名のつく

程の上天気なので、往來を行く人の下駄の響きが、静な町丈だけに、朗らかに聞えて来る。肱枕ひじまくらをして軒から上を見上げると、綺麗な空が一面に蒼く澄んでいる」という一節なども、簡潔なる描写の裡に、初秋の自然が極めて印象的に描き出されている。また、巻尾の二十三章に「梅がちらほらと眼に入る様になった。早いのは既に色を失って散りかけた。雨は煙る様に降り始めた。それが霽はれて、日が蒸されるとき、地面からも、屋根からも春の記憶を新にすべき湿気がむらむらと立ち上った。背戸せどに干した雨傘に、小犬がじゃれ掛かって、蛇の目の色がき

らきらする所に、陽炎かげろうが燃える如く長閑のどかに思われる日もあつた」という一節があるが、この一節などは、慥かに先生独特の名文だと云つていい。

若し、『それから』に於いて、先生のリアリズムが成形したという説を妥当とするならば、『門』に於いて、先生のリアリズムが確立したというのを至当とするだろう。先生の芸術的生涯の上から見ると、『門』は慥かに重大なる意義を持つべき作品である。

日本文学電子図書館

転向の時代

著 者：赤木桁平

制作者：宮澤一郎

底 本：「夏目漱石」

講談社学術文庫、講談社

2015年12月10日 第1刷発行

日本文学電子図書館